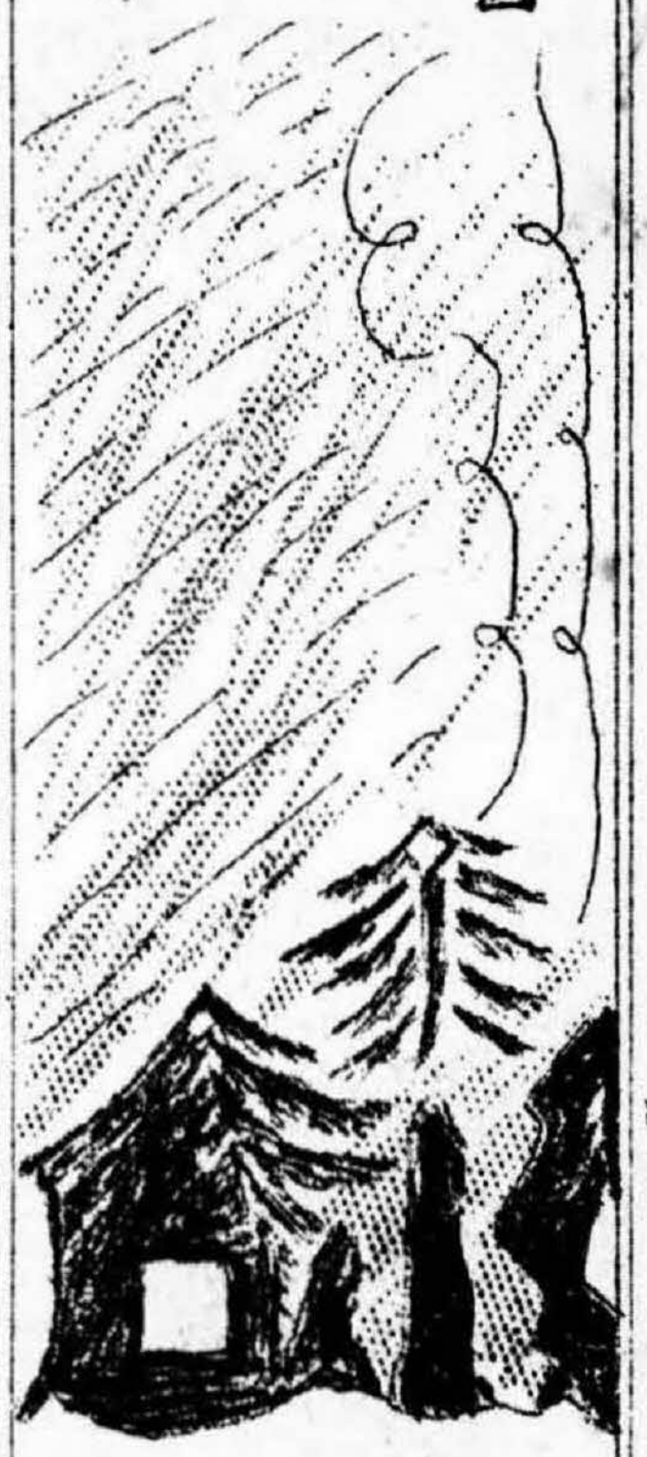
會報



第四年第六号

昭和八年九月十日発行

通巻第三十号

鳳凰山塊に遊ぶ

現在に於ける僕の登山は健康の保持を第一の目的としてゐる。少くとも登山の動機は健康の為である。此ノ意味に於て僕の登山は季節を余り考慮しない。出来得れば四季を通じて平均に登山したきものと思ってゐる。夏山を敢て辞せざるの弁斯の如し。殊に贅肉に苦しめる近藤氏及其他の如きは夏山の苦行に勝る薬はない。

八月五日　晴　―　驟雨

中央線の列車に暫らく御無沙汰してゐた処何時の間にか甲府を電化して苦みで有名だった夜汽車が愉快な旅となって了った。韮崎駅を三時過に出発、釜無川を渡り、緩かな坂をゆっくり登って鳥居峠に出たのが六時半。今朝の汽車弁が胃に悪かったのた嘔気がして苦しかったが峠のベンチで横になり少し休んだら漸く落着いた。コア澤の下流の方に甲斐駒の頭が覗いてゐた。八時青木湯に着いた。睡眠不足と暑気が強い為に茲で大休憩すべく座敷へ上った。午睡一時間、飯盒の炊事一時間、食事其他一時間、都合三時間の休憩。十一時出発。中村テル子氏の引率するYWCA登山隊数十名の後に従て登る。午後一時南精進滝を見物して稍登ったところで最初の夕立に襲ハレタ。道場がなくお釈迦様となって了った。例の女学生達は夕立に辟易したか茲から退却下山した。山の清浄の為に喜んだ。

白糸の滝、五色の滝と名所は皆見物して夕立に逢はれ乍ら午後五時二十分北御室の小屋に着いた。小屋は縣設の立派なものだが一晩中俸られて寒さの為に眠れなかった。

ドンドコ沢道は大部分沢を離れて小尾根の上に通じてゐる。終始木立の中を行くので夏でも余り汗が出ない。沢を登るのだと思ふと間違である。然しどの滝も路から四五分で見物出来るから横着せずに行くべきである。北御室の小屋は二三〇〇米位の水辺にある。別に新しい小屋がその上の燕頭道との交点に出来てゐたが、その筋の認可が得られず現在は使用に耐えない。

八月六日　曇

午後六時半朝食が終り漸く出発。五時近に出発

の心算だつたが朝の出発は大抵心算違ひとなる。残念ながら雨模様。賽の河原を呑気に登つて行くと、やがて七時十分、五六寸の石地蔵さんが三四十並んでゐるところに出た。地蔵佛と赤拔の頭との鞍部である。地蔵佛は例の珍形を眼前に聳立せしめてゐた。雨雲の為八ケ岳も甲斐駒も見えない。賽の河原の石地蔵さんの首が申合せた様に落ちてゐた。登山者の悪戯と思つたのか、何かの雑誌で非常に憤慨してゐた人があつたが、悪戯の主は風だそうだ。

地蔵佛は茲の記念撮影で失敬して先へ急ぐ。尾根通しを行く。白鳳峠道と岐れ、赤拔の頭の左を巻いて岳樺、這松等の間の小経を追ふ。観音岳の鞍部へ出てから明るい花崗岩の岩尾根を暫らく傳ふと二八四〇米の観音岳頂上へ出た。頂上は極めて狭く磊々たる巨岩の間に二等三角点の標石があつた。時に午前九時。晴れてゐたら野呂川の深い谷を隔てた南アルプスの大観は素晴らしいに違ひない。殊にあの大樺沢の急峻ふ思出多き古戦場と白根御池との所在を指呼して見たい。

薬師岳へは呑気に歩いて二十五分。海岸の白砂の如き花崗岩砂上の散策だ。眺望が效いたら随分気持の良いプロムナードであらう。薬師から青木へ降る所謂中道は明瞭であつたが南御室への道は皆目判然しない。砂掃岳の岩峯を越えると漸く小径が針葉樹林の中を通じてゐた。十一時二十分南御室に着いた。

以前は沢山小屋があつたと云はれてゐるが現在ではやつと二人位入れる程度のヒドイ小屋があるのみだ。水は大棚沢の水源約一町の処から僅かに出てゐた。

南御室からは明瞭な林道となり辻山の北側を辿る。辻の小屋跡、切明小屋跡等を通ると径は常に尾根の稍西側を巻いて徐々に降つて行く。

大崖頭山の北の鞍部から辻山の中腹を搦んで野呂川の廣河原へ出る林道が新しく出来たので芦安からの白峯入は頗る便利になつた。午後一時半、杖立峠の小祠に着いた。杖の様な樺切れが沢山あつた。西側は開いてゐるので白峯三山の良きpanorama であらうと推測されるが、此の最後の展望台も雲の為に遮られて終に今回旅行の魅惑の一であつた白峯の大観に接するを得ず恨みを遺して夜叉神峠に降つた。杖立峠から芦安へ至る道位ひ歩き難い嫌な道は先づあるまい。杖立峠まで折角良い気分で歩いて来たのに、此の降りで気分をすつかりブチ壊して了つて残念であつた。

芦安の部落の畑が見え初める頃、道傍に、白根御池龍王大神を祀った小祠があった。古来白峯へ入る表口であった此地に、あの大棒池の竜王を祀る小祠があるのは當然であらう。白衣の登山者が村端れにある此の小祠に跪いで山行の無事を祈り敬虔な気持を以て白峯の山に入って行く昔の人の心持が読まれる。スキスの村端れにある十字架に祈を捧げて山に入るスキスの人達の心と同じである。登山がスポーツ化した現代に於てかゝる気分が失はれて了った事は當然な事であらうが淡い心寂さが感ぜられぬでもない。

進行して行く夕立の後を追ふて、六時半、有野の部落に着いた。七時のバスに乗り百田で乗換へ、八時韮崎駅へ、それより午後九時の下り列車に乗って十一時過ぎ上諏訪布半に入った。

（平家蟹）

日原鐘乳洞にもぐる

今日は會社旅行會主催の日原川キャンピングと云ふ昨今流行の企ての日である。

幹事が来て是非先発隊に加はってもらひ度い。先発隊は晝飯後直に目的地に出向く事に万事準備してあるとの事此点土曜日と雖も午後六時迄机に噓り付いて居らねばならぬ身には実に嬉しい。

先発隊とは幹事二人と僕である。新宿駅でまい家に帰ってしまうつもりで居たが幹事の監視厳重を極めて到々電車に乗込ませられた。

空工合が生憎へ実は雨が降ると旅館泊りになるので其方が願ってもなき幸と内心頗る喜ぶ）悪く青梅駅辺からポツ〳〵楽々圏辺ではザー〳〵御岳駅ではゴー〳〵と云った調子で氷川町に着いた時は天地晦冥全くの暴風雨である。愈々旅館泊りなるかと思へば気が浮々する。所が幹事は全然反対である。意気は阻喪し。加ふるに咫尺を辨ぜぬ猛雨にも不拘宿賃を支拂ふ事を極力キャンピング生活の建前より反対し遂に愚生の重大なる建言を退けて小学校の運動場に泊る様に交渉しやう。と云ふ事になった。幹事は「運動場に寐るなんて事は生れて初めてだし将来の経験の為めにも、よろしい」てな調子で手が附けられない。愚生は嘗って本科二年時代北海道は釧路から阿寒登山隊に加はって途中徹別の小学校の運動場に寐かされて運動場に寐ると云ふ事が如何に不愉快であるかと云ふ事を充分承知して居るので断然独り旅館へ泊らんとも考へたがまゝ交渉の仕様に依っては小使室辺へもぐり込むつもりで氷川小学校長に交渉した処、特

別の計らひで柔道々場（畳が敷いてある）に泊めて貰ふ事にした。

愚生は昔から諸分色々な処に寐た経験がある。釧路では押入れに万年床を造って折から北海道に遊びに来た森竹君や宇佐美君の心臓を寒からしめた事もある位であるがまだ柔道々場には寐た事はない。

まあ雨天運動場よりはましである。

× × × ×

早朝は一寸天気になりそうであったので日原鐘乳洞の見物に出掛けたが途中が猛雨と変り日原川は赤泥川にあってしまった。

臍迄濡れて鐘乳洞の入口に立った。一生懸命歩いて来たので雨中と雖も流汗淋漓滝の如しであるが一瞬で氷の様に冷えてしまった。

寒風全く膚を突刺くばかりの烈風が穴から吹き出して寒いのなんのって歯の根が合はない。（此の真夏に寒くてぶる〳〵震えるなんて一寸羨やましいだらう。）

穴は縦二尺幅一尺五寸位、白樺の燃える光を頼りに匍ひになって此の少さい入口から這ひ下る。下ると云ふから頭が下になる。心細い事限りない。背中の上から水がザー〳〵降りそゝぐ処もある。

這ふ事二十間位で地獄の入口に立つ、一行は皆鉱山會社の豪の者地下の穴潜りは御得意の筈であるが然し其の筈が筈でない。

さゝ大変である、誰かゞ引返さうと云ふと誰も賛成〳〵てな理である。是は全く無理もない。地獄であるからいやがる。案内人は此処は三途の川、此処は賽の河原、やれ天井知らずそれ劔ヶ峯へ此処で一行は天井からぶら下って居る鐘乳石に頭をいやっと云ふ程打ちつける事になって居る〉とそれからそれへと客を恐がらす、案内人はお客に恐怖心を極力抱かしめる可く努力する「此処は五間位（実は二間足らず）断崖になって居ります、下は三途の川、気を付けて降りて下さい。あゝ危い危い、そっちは駄目〳〵」てな調子で不必要に大聲を出す、一行は物凄い寒さの為めと三途の川に落ちると云ふ恐怖の為め皆んな「ガタ〳〵」震ひである。

無理もない、普段、會社で金儲けの話と女の話しか知らない連中ばかりであるから地獄に落る恐れが漫々と体にこたえるらしい。

總てが暗中模索、僅かな光を頼りに絶壁や険崖を攀ぢ上り這ひ下る（是は感じである）途は上下東西南北四通発達と云ふ言葉が當嵌る。

若し誰か火を見失えば物凄き聲をはり上げて救けを呼ぶ、家に帰れば子供の二三人ある様な紳士が大声で火を呼ぶ有様は物凄い、それでも三途の川を渡って十二観音辺では一行大分馴れて　うくしい連中は早や物慾を出す、　早く帰って　ムライスを食べたいし　なんて無邪気な慾を出して案内人に叱られる。

一行は落磐の為め命を失ふ者もなく無事地獄から浮び上った。上って見て驚いた誰れもかれも鬼だ、而も黒鬼である、子供の時分から地獄の鬼は赤鬼に青鬼と決って居る様に思って居たが黒鬼とは変ったものだ。

鼻煩耳手、それに背から腹から眞黒ろんくろんの黒鬼である。

よく見ると松明の煤が石炭岩を眞黒にして居る是れに凹り付いたのだから堪らない。

鼻の穴も眞黒になって（茲中川君の言をお借りすると）鼻から息が出る度に黒い煙が濛々と飛出すと云った調子である。

むゝ三途の川も渡ったし賽の河原にも立ったから今度行く時には逝はずに行ける。

八―八―一五、　（裡）

名古屋のドロ公

八月二十八日の夜八時半頃「コンバンは、エヘッヘヘ、」と陰気味悪い声を出して玄関（？）から這入って来た暗闇の紳士があった。ドロ公だ、珍らしい客獣だ。辺りが急に黄ろくなった様な気がした。名古屋からアフリカ丸の一等船客となって大阪へ遊びに来、商用序に乃公の巣を訪問して呉れたのだった。何は兎もあれ嬉しい。お互に離れてゐると会ふ機會がないものを大阪まで来たからといってわざ〳〵神戸の西端れ近来て呉れるといふ事は中村橋の動物園時代の仲間でなければや出来ない事だ。彼氏親父を昨年の十月なくして以来一人での時計屋を切廻してゐるらしい。職工の首を切って労働組合の親方から五拾円せしめられたり独り者の気安さに夜はダンスホール、スケート、ビール、麻雀と休みの日（一日と十五日だけた相だ）には馬に乗せられて郊外と云はず栄町と云はず得意になって引摺り廻はされてゐるのが此の頃の日常らしい。羨しい身分だと云へば云へるが反面に一家の主人たる責任も相當重いだらう。自分の商売となると休みにも矢張り事務所に出たくなるものだ相だ、俺達の様に日の暮れるのを毎日待ってゐる様な不届き者とはチト訳が違ふらしい。

来たのを幸ひ早速麻雀屋へ連れて行ったが先生一人マイナスだった。全く教へ甲斐乏しない奴だ。翌日は休みぢやなかったが少し胃が痛むからと會社の方へは電話をかけて置いて二人で高取山へ登る。何だか内へ来た者は皆高取山の薄中になる様だ。此の高取山は彼の先祖が祀ってあるのだ。所が三角点のある方の峯に「荒熊神社」といふのがある。ドロと熊と如何なる関係があるのか二人に解らないのだから世間の奴等に解る筈がない。水蒸気が多くて淡路島は愚か目の下の海も見えなかった。彼も商売人となって御幣を担ぐ様になったと見え、それとも先祖崇敬の念からかお賽銭を投げてピヨコンと頭を下げてゐる。恁ふすると時計が売れるんだ相だ。

家へ帰って行水をやり平野へ行ってから元町の三越でめしを食ひ、ブラジレイロで冷いコーヒーを呑んで別れた。午后大阪へ行くと云って居たからトンちやんなんかに会った事だろう。商売も商売だが動物園の元締にも敬意を表して行かねば相済まぬよと云って置いた。

× × × ×

結論＝ドロ狐事小泉吉雄は今秋辺り止むを得ざる事情によりハイラートをするらしい。鼻筋は相変らず余り眞直ではないが頭のゲレンデの度くなった事は驚異に値する。あの頭は四十近はもたふい。トンちやんとどっちが先かと面白い競争が中京と西京で行はれてゐる訳だ。

八、八、三。夜　（熊）

案内日記

七月十三日、H氏から上高地の国際ホテル建築の用事で出掛けるから一しよに山に行こうと電話がある。早速旦那のお伴をして銀座に出かけて食料をやっとこさと買込む。旦那のヅボンを求めに松屋に入ったら胴廻りが大き過ぎて會ふのがない。御婦人用の青い縁をとってあるのならば裕があって好いかも知れない。

十四日、最後の日の飯田町の駅。明治二十九年とかに始まって数十年、明日からこの駅もなくなるのだ。懐かしい飯田町駅よ。サヨナラ。新宿にてコンちやんの見送り。アイスクリム、羊かんの餞別。もらったからほめる訳ぢやないが矢張り悪口仲間が一番うれしい。今度からこれを貰ふことにきめる。

十五日。飛彈屋休息、旦那に穂高行をすゝめたら草鞋、杖など買った店で穂高の寫眞を見て心細

そうな面持で綱一本買って行こうかあと云ふ。二年型シボを貸切で大正池まで飛ばす。ホテルの現場まだコンクリートを打ち終ったばかり。清水屋に泊る。

夜商大のテントを訪ねて、声をかけたら、長い黒いしやくれた様な声が返事する。聞いた様な声と思ったら笠へ行った筈の堀岡君だった。カンちやん始め若手チヤキ〳〵の連中数名トグロを巻いてた。

十六日、雨だし、テントの連中も困るだらうと朝食の給仕を退けて、飯盒を出して飯びつの蓋をとって入れようとしたトタンに女中が入って来た。カンニングペーパーを落して、拾はうとしてゐる処に先生が来た様ふものだ。嗚呼世は浇季、陰徳あれど陽報ふきか。

テントへ行って一日遊ぶ。トランプ、花など。バットの箱で麻雀を拵らへようかと云ふものも出て来る。あの箱の裏でよくアミダをやったっけがなあ。

十七日、七時半発、明神祠へ参詣。旦那賽銭ではなくてこれはこの社の維持費としてと一銭也献上する。

一俣小屋小憩、晝食。二ノ俣の上にて後の鳥のカンちやん一行が先に来て食事をしてる。

槍沢の雪渓雪少なし。

大槍小舎小憩。小舎の上にテントを張る中に可憐の少女一人。一同肩はあの辺殺生はあそこと云ひながらそれを見に出る。

肩についた時大槍の穂先は大身の槍の血ぶるひした様に夕陽に赤く輝いてた。

十八日　小槍に行く。一人引ぱり揭げられる毎に小屋前の観衆、拍手する。一間一匹釣り場げてさへ面白いのだから、リユーリック号でも引揚げるのは金を出して観ても嘸かし面白からむと感ず。

一同は穂高へ。こちらは旦那の後から東鎌尾根に向ふ。案内たるものいつも一番後だから世話なし。

西岳の上りの暑さ。大天井を巻く新道。燕山荘七時半。最後なり。若き女性四名泊り合す。

十九日　出発も一番後。小舎に女子ズロースの（あ、失禮、御婦人は読まないで下さい）忘るゝあり。

十時中房につき温泉にひたる。汗になったシヤツ、サルマタ、フンドシ（又失禮、御婦人は〳〵〳〵）を温泉にて洗ひ、庭前の樹枝にかけて乾

す。ビールを飲んで食事をすると眠くなって一同枕を並べて討死。この間にっこれなる枝にうっくしきものかゝれり。よりて見れば いろが妙にして常のものに非ず」とか云って乾物でも持って行かれたら、羽衣なき天人でも無いが、江戸への道中うすら寒からむと思ふ。

一瀬までまた一汗かいてそれから乗合自動車、電車、汽車、汽車は篠井乗換へ上野へ、上野へと向って材木の様に眠る男を驚地に運ぶ。

（PEN）

関西だより

御無沙汰してゐます。元気ですか、當方皆相変りませんから御安心下さい。

今回はじめて関西針葉樹會を開き左記署名の者が出席しました、山の話はさっぱり出ません。病気の話だとか子供の話位なものです。東京とは雲泥の差ですかね（ワイ談は出ませんが）

来月から大体第三土曜日に世帯持ちの家で開く事になりました。第二回はトンちゃんの家でやります。今晩は如水會に集り、球を撞いて、北浜の野田屋へ行きれ時に追拂はれ今、五色といふテイルームに居ますがあと二十五分で之も追立てを食ふ所です。では又

昭和八年八月二十六日

吉澤一郎　高木英二　渡辺九郎　赤城鈴太郎　五十嵐数馬　太田又一

× × × ×

なかなか残暑がひどいですなあ、諸兄御僕在の事と思ひます。秋とゝなれば山が何より好ましくなりますね。僅かな暇を見て歩いて見たいです。たまには新鮮な清澄な空気を吸って見たいです。飯盒のオマンマも懐しいです。

會員名簿の訂正補生を左に記します、

吉澤一郎　神戸市須磨區山下町三ノ五一番屋敷。

久保田禮治　東京市牛込區南町二一

中森長太郎　太牟田市本町六ノ一四四　堀方

太田又一　大阪府泉北郡浜寺町石津四四

大阪市住吉区住吉町一七三一　電話

○本會報の原稿は締切日の如何に拘らず何時でも小生宛御送付願ひます。端書一枚でも結構です。（小川）